3.　天王様にみる歴史的風致

(1) はじめに

八坂神社とは、京都市東山区祇園町の八坂神社を本社とし、牛頭天王及び須佐之男命（素戔嗚尊）を主祭神とする神社である。牛頭天王及び須佐之男命に対する信仰を天王信仰と呼び、祇園社や天王社を拠り所として全国的な広がりをみせている。

もともとインドで祇園精舎の守護神とされた牛頭天王は本来疫病を流行させることのできる神とされ、須佐之男命も疫病を操ることのできる神性を有しているために結びつけられたと考えられている。そのため、天王信仰に基づく祭礼の多くは、怨霊を鎮め疫病退散を願って行われる祭りで、疫病流行期である夏に行われている。祭礼は八坂祭、祇園祭、天王祭、天王様などの名称で呼ばれ、牛頭天王を渡御するときの乗り物である神輿を天王様と呼ぶこともある。

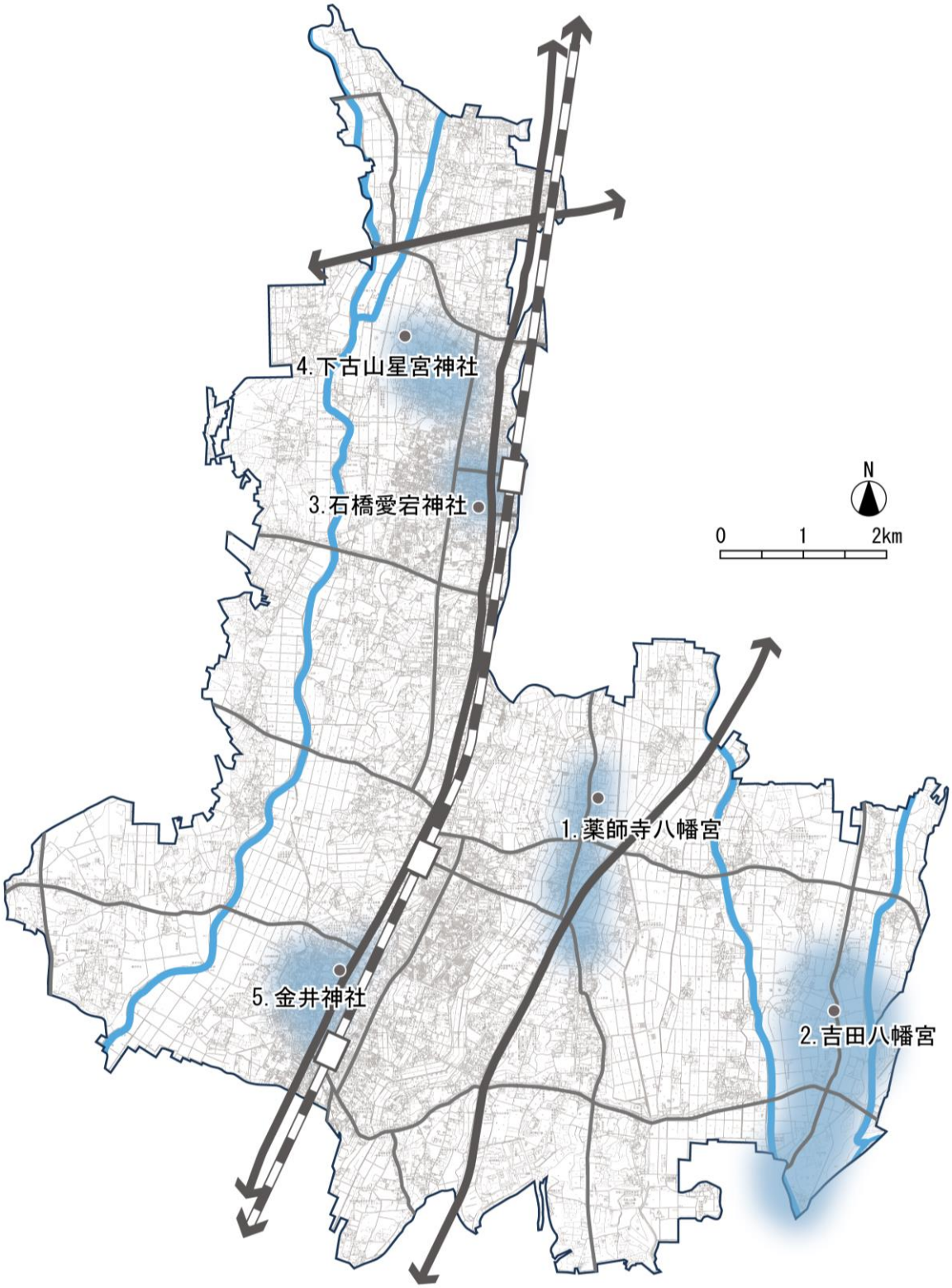
本市の天王信仰に基づく祭礼は、神社の祭神である牛頭天王にちなんで「天王様」と親しみを込めて呼ぶ人々も多く、祭礼は市内のほぼ全域で行われている。そのうち、とくに氏子が多く規模の大きな天王様が行われているのは、薬師寺、本吉田、石橋、下古山、小金井の５つの地域である。（※本計画では、市内で行われる比較的規模の大きな５か所の祭礼について、歴史的風致を構成する重要な要素として「天王様」という。）

天王様における神輿渡御は、集落の主たる動線を中心に行われているが、現在は市街地化した地域も巡行するように変化してきている。天王様の準備や当日の運営、神輿渡御は、それぞれの地域で氏子や住民が協力して行っており、天王様は地域の人々が交流し触れ合う機会を提供し、コミュニティの維持にも寄与している。

薬師寺八幡宮祇園祭の神輿渡御

(2) 下野市の天王様

天王信仰に基づく祭礼は、本来は疫病除けを目的としたものであるが、地域によっては五穀豊穣祈願の意味合いを含む。五穀豊穣祈願を表す特徴として神輿の屋根の上の鳳凰に早稲の稲が飾られる。



天王信仰に基づく祭礼（天王様）の分布

下野市における天王様（天王信仰に基づく祭礼）

	神社	所在地	開催時期	祭礼の概要	神輿
1. 薬師寺八幡宮祇園祭	薬師寺 八幡宮	薬師寺 （南河内地区）	7月 第2･第3 日曜日	・ 2週にわたって開催され、1週目は宮出し行事と神輿渡御、2週目は氏子地域の会所祭と宮入り行事が行われる。2週目までの期間は、お仮屋に神輿が飾られ、地域住民が参拝する。 ・ 神輿とともにお囃子屋台も巡行し、賑やかな演奏が行われる。	
2. 吉田八幡宮八坂神社夏祭り	吉田 八幡宮	本吉田 （南河内地区）	7月 15 日 前後の 土曜日と 日曜日	・ 豊作祈願の意味を込めて神輿の屋根の上に早生の稲穂を飾る。 ・ 昼過ぎから子供神輿が渡御し、夕方から大人神輿が廻り始める。 ・ 世話人が氏子の各戸を訪ねて厄除けの行事である梵天ふりを行う。	
3. 石橋愛宕神社八坂祭	石橋 愛宕 神社	石橋 （石橋地区）	7月 15 日 前後の 土曜日と日 曜日	・ 1日目はおみこし広場と称する地域住民主体の祭りが行われる。自治会の神輿のほか、幼稚園･中学校･企業等が製作した神輿がグリム通り（中央通り）を練り歩く。 ・ 2日目が神社主体の祭りであり、6町内を神輿が練り歩く。 ・ お囃子の演奏も行われ、祭りを盛り上げる。	
4. 下古山星宮神社八坂祭	下古山 星宮 神社	下古山 （石橋地区）	石橋愛宕神社八坂祭と同日 土曜日のみ	・ 大人神輿と子供神輿が練り歩き、神輿には山車が伴う。 ・ 大人神輿は自治会所有の神輿で、石橋愛宕神社のおみこし広場にも参加している。	
5. 金井神社八坂祭	金井 神社	小金井 （国分寺地区）	7月 15 日 前後の 日曜日	・ 自治会が所有する子供神輿が練り歩く。同日に小金井駅東にある柴北自治会でも子供神輿を行う。 ・ 関連する祭りとして、愛宕祭（子供相撲）が行われる。	

3-1. 薬師寺八幡宮祇園祭

1）　薬師寺八幡宮祇園祭の概要

薬師寺八幡宮祇園祭は、かつては旧暦６月 11 日と 18 日、現在は７月の第２、第３日曜日に行われている。薬師寺八幡宮と神社西側を南北方向に貫く県道結城石橋線を主な舞台として薬師寺一丁目から薬師寺六丁目及び下原、西区、祇園町の薬師寺地域の広い範囲を巡る神輿と地元の囃子連によって演奏されるお囃子屋台が巡行する大変賑やかな祭りである。

薬師寺八幡宮祇園祭の起源は明らかではないが、嘉永２年（1849）４月の『薬師寺村明細帳控帳写』に「祇園祭礼毎年六月一八日・一九日家台出シ子供手拍子踊興行御座候」とあり、この頃にはすでに祇園祭が執り行われていたことが分かる。現在祭礼で使用されている神輿は県指定無形文化財「石橋江戸神輿」の技術保持者である小川政次氏が最初に製作したものである。

薬師寺八幡宮周辺は、近世において日光街道の脇往還である関宿通多功道が整備され、様々な商店や職人が集まり、町としての機能を持っていた。現在も当時の町割が残されており、県道沿いには近世以降に建てられた社寺や昭和 30 年代に建てられた石蔵等の歴史的建造物が建ち並んでいる。

2）　薬師寺八幡宮祇園祭に関連する歴史的建造物

①　薬師寺八幡宮

①－１　本殿および拝殿：県指定文化財

薬師寺八幡宮の沿革や社殿の建築形態については第２章第１節で述べたとおりである。

①　－２　八坂神社

八坂神社本殿

八坂神社は『薬師寺縁起』で下野薬師寺から改称された安国寺で戦国時代に焼失した堂宇のうち、鎮守のひとつである「天王」であると考えられている。薬師寺の野口邦祐家に伝わる延享元年（1744）９月の『下野国河内郡薬師寺村絵図』には、後筆であるが虚空蔵の北西に「牛頭天王元社地」と記載されており、かつては祇園原にあったことが確認できる。その後、祇園原の住民とともに薬師寺に移り、平成 28 年（2016）に薬師寺八幡宮境内へ遷宮されるまでは、薬師寺八幡宮の境外摂社として薬師寺八幡宮の南西 300mほどの場所に位置していた。なお、遷宮にともない拝殿や鳥居が新築されたが、本殿は移築にともない修理を行った。本殿は一間社流造銅板葺で、彫刻等の装飾は比較的少なく簡素な造りであるが、詳細な建築年代は不明である。八坂神社の年代に関する資料として、八幡宮内に宝暦３年（1753）の年号のある棟札が残されているが、現存する本殿は、建築形式等から明治から大正時代に建てられたものと考えられている。

3）　薬師寺八幡宮祇園祭に関連する景観要素

薬師寺八幡宮祇園祭における巡行ルート上には、天王様にみる歴史的風致に欠かせない景観要素が分布する。

①野口良一家住宅　石蔵

薬師寺５丁目に所在し、県道結城石橋線に西面する農家形式の屋敷構えをもつ民家である。敷地内には昭和48年（1973）建築の主屋と付属屋のほか、梁に昭和38年（1963）の年号の墨書がみられる石蔵が現存する。石蔵は大谷石の組積造（そせきぞう）２階建、切妻造平入桟瓦葺で、ブロック状に成形した大谷石の内部に鉄筋を通して積んだという。入口建具の鉄扉（てっぴ）、２階開口部周りの柱形や建具の意匠等に比較的新しい要素もみられるが、大谷石を用い、伝統的な蔵の規模とすることで、伝統的な景観に調和させているといえる。祇園祭の際の主な巡行ルート沿いに建ち並ぶ石蔵とともに、この地域独特の景観を作り出している。

野口良一家住宅石蔵

②御鷲山（おわしやま）古墳

田川西岸の台地上、下野薬師寺跡の北側にあり、６丁目会所の西隣にある前方後円墳である。前方部を西に向け２段に築造され、墳丘の全長は約74mで、埋葬施設はくびれ部の前方部よりに、南に開口する両袖型の横穴式石室が設置されており、石室は凝灰岩の切石を用いた複室の構造を成す。出土遺物としては鉄鏃（てつぞく）や刀子、馬具のほか、円筒埴輪、朝顔形埴輪、形象埴輪などが確認され、６世紀後半の築造と考えられている。

御鷲山古墳

③藤麿墳（ふじまろふん）：市指定文化財（遺跡）

神輿の巡行ルートとなる県道結城石橋線沿いにあり、日光開山の祖である勝道上人（しょうどうしょうにん）の父藤麿を埋葬したと伝えられる地に建てられた石碑である。龍興寺所蔵の古文書『藤麿墳勧進帖（かんじんちょう）』には、勝道上人の父藤麿が埋葬された土地を後世に残すために、薬師寺村役人及び龍興寺の世話人が発起し、安政４年（1857）にこの石碑を建立したとの記載がある。

なお、石碑は自然石でできており、高さ142㎝、幅60㎝、厚23㎝を測る。

藤麿墳

4）　薬師寺八幡宮祇園祭の流れ

①事前準備

お囃子屋台の準備（屋台に大鼓（オオド）を固定）

薬師寺八幡宮祇園祭にあたっては、毎年、神社・当番町・神輿愛好会から成る夏祭り実行委員会が組織される。当番町は、氏子地域の薬師寺一丁目から六丁目までの６つの町内（自治会）が毎年交代で担当する。当番の順番は、一丁目→六丁目→三丁目→五丁目→二丁目→四丁目の順に四丁目から六丁目までの薬師寺上（かみ）の町内と一丁目から三丁目までの薬師寺下（しも）の町内が交代であたり、当番町の中から祭の運営責任者となる本世話人が選ばれる。

当番町は神輿の屋根の上に飾られている鳳凰に銜（くわ）えさせる稲を確保しなければならないため、前年度から祭りに向けての準備を始める。本格的な準備は祭りの３か月前頃から開始され、神輿の巡行ルートの確認等が行われる。その後、祭りの１週間前から当日の午前中までに、神輿やお囃子屋台の組み立て、会所の設置等を完了させる。

②練習等

お囃子屋台での練習

神輿の巡行に伴うお囃子の練習が本格的に始まるのは祭りの１か月前だが、後継者育成のために各町内の囃子連の年長者が小、中学生と一緒に 12 月から練習を開始する町内が多い。四丁目から六丁目までの薬師寺上の町内はそれぞれの公民館、一丁目から三丁目までの薬師寺下の町内は二丁目公民館に集まり、19 時から 21 時頃まで練習する。

練習は代々口伝により受け継がれており、はじめに指使いや叩き方を覚える。楽器を演奏できるようになると、文句（太鼓や笛の音を文字で表現したもの）を書いたノートなどを見ながら、年長者が唱える文句に合わせて練習を行っている。

平成 30 年（2018）の祇園祭では薬師寺下がお囃子の当番となっていた。祭りの１週間前になると、練習場所を公民館から移動し、屋台を保管している薬師寺コミュニティセンターで屋台に楽器を設置して本番さながらの練習が毎日行われる。

③当日の流れ（神輿渡御）

１週目（第２日曜日）は、八幡宮境内八坂神社にて祇園祭例祭が行われたのち、神輿に御神体を遷す遷御（せんぎょ）の儀式が執り行われる。続いて、発輿祭（はつよさい）が行われ神輿が神社から出発する（宮出し）。神輿は、お囃子の演奏とともに氏子地域全域を 14 時から 19 時まで巡行する。神輿の休憩場所では、担ぎ手や囃子連に飲み物などが振る舞われ、神輿の掛け声やお囃子の音を聞きつけた人々が集まり、お賽銭を供えたりする。神輿の巡行が終わると三丁目に設置されたお仮屋で着興の儀と玉串奉納が行われ、神輿はそのままお仮屋に安置される。

宮出し（１週目）

お仮屋での着興の儀・玉串奉納（１週目）

神輿は翌週の会所祭が行われるまでの６日間、お仮屋に飾られる。お仮屋には宮司と当番の世話人が待機し、供物の受入れの対応や御札の配付を行う。氏子はこの期間に神輿へお参りをし、供物を奉納する。とくに「中日（なかび）」と呼ばれる木曜日には夕方からお囃子の演奏が始まり、その音を聞きつけて多くの人々が訪れて神輿に宿った神様にお参りをする。

お仮屋に飾られた神輿（中日）

２週目（第３日曜日）は、お仮屋発輿祭を行ったのち、各町内に設けられた会所にて宮司と総代で祈祷を行う会所祭が執り行われる。神輿は宮司、総代とともにお仮屋を出発し、県道結城石橋線を南下し、一丁目公民館へ向かう。宮司と総代は公民館を訪ねて自治会長や当番に出迎えられて 15 分程度の会食をとる。神輿はこの間会所の前に作られた竹を四方に立てて注連縄を巡らせた聖域に置かれ、人々はお囃子の演奏を聴きながら待機する。会食が終わると、神輿の前で宮司によるお祓い、総代や世話人代表等による玉串奉納が行われる。氏子は再び神輿を担いで次の会所の二丁目公民館を目指して巡行し、同様の神事を各会所で執り行う。

会所祭（２週目）

神輿とお囃子屋台の主な巡行ルートとなる県道結城石橋線沿いには歴史的建造物が所在しており、三丁目の会所祭の後、巡行ルートのほぼ真ん中にあたる薬師寺四丁目交差点から約 80m 北上すると、右側に野口良一家の石蔵が見えてくる。さらに北上し、薬師寺から 300mほどの場所の左側にある藤麿墳を通過すると、最後の会所祭が行われる六丁目公民館が見えてくる。六丁目公民館の西側には御鷲山古墳が所在し、御鷲山古墳を背景に神輿が鎮座し、その隣でお囃子屋台が演奏される薬師寺八幡宮祇園祭独特の風景を見ることができる。すべての会所を廻り終え、会所祭が終了すると、宮司は神社へ戻り、神輿の帰りを待つ。

神輿とお囃子屋台は、会所祭終了後も町内を 21 時頃まで休憩をとりながら巡行し、薬師寺八幡宮へ戻る。参道に神輿とお囃子屋台が入ると、担ぎ手の威勢の良い掛け声で神輿をもみ、お囃子の演奏も一層賑やかになり華やかな雰囲気となる。この音を聞きつけて地区内の人々が参道に集まり、多くの人で溢れか

える様子は祇園祭のなかでも見ごたえのある場面のひとつといえる。鳥居の前でその様子を見守る宮司、総代、猿田彦とともに境内へ入場し、５分ほど神輿をもみ、最後に神輿を高く掲げて当番町の世話人の合図で神輿を下ろす。無事に祭礼が行われたことを祝して世話人と神輿愛好会会長の音頭による三本締めをした後、宮司と世話人が御神体を八坂神社へ戻し、八坂神社内で宮司、総代、当番町世話人、神輿愛好会会長による神事が行われて祭礼が終了する。

④特徴的な活動【お囃子】

お囃子とは、祭りの中で神輿とともに練り歩く屋台や山車等の上で演奏される音楽のことである。お囃子には神楽囃子と祭囃子があり、祭囃子の類に本市の特色がみられる。

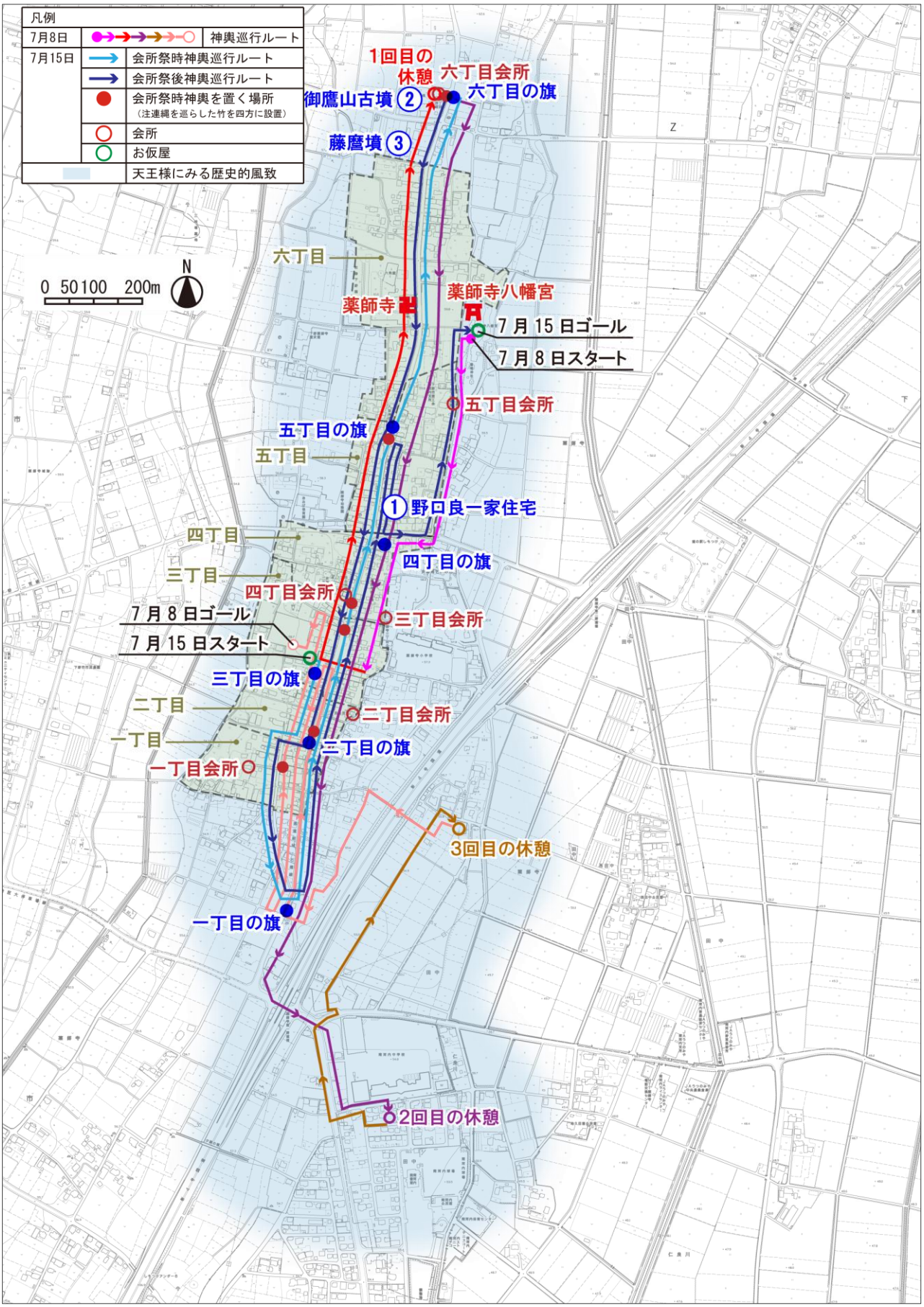
薬師寺八幡宮祇園祭では、薬師寺地域の囃子連を中心とした賑やかなお囃子が演奏される。お囃子は、２つの系統からなる。四丁目から六丁目までの薬師寺上に伝わるお囃子は、駒津流五段囃子と称する軽快なお囃子であり、伝承によれば川中子辺りから伝わったという。現在、一丁目から三丁目までの薬師寺下（しも）に伝わるお囃子は、壬生町安塚の囃子連から戦後途絶えていたものを習い直し、再開したものである。お囃子の当番は、氏子地域の６町が１年ごとに交代で担っており、薬師寺下（しも）は下囃子連（しもはやしれん）として合同で活動し、薬師寺上（かみ）は各町内で囃子連を組織して活動している。

祭り１週目には、神輿渡御の際にヤグルマが演奏され、休憩場所では五段囃子（エドワカ、ショウデン、カンダマル、カマクラ、シチョウメ）の中のシチョウメを中心に２、３曲が演奏される。長時間の演奏のため、薬師寺上地区では当番町内以外の囃子連が手伝いとして参加する。２週目は、各町内の会所に向かう道中で１週目と同様にヤグルマを演奏し、会所に到着すると主に五段囃子の中のシチョウメを演奏する。祭り運営を取り仕切る当番町の会所では、他の町内の会所に比べ宮司と総代が滞在する時間が長いため、休憩を取りながら五段囃子すべてを演奏する。

祭礼のクライマックスである神輿が神社に戻り境内に降ろされると、ニヘンガエシが演奏される。このニヘンガエシはこの時にのみ演奏される曲で、参加者に祭礼の終了を告げる曲である。囃子連は演奏が終了し宮入りの神事を見守った後、観客とともに帰路に着く。

お囃子の演奏

お囃子屋台の巡行



巡行ルートおよび歴史的建造物（薬師寺八幡宮祇園祭）

3-2. 吉田八幡宮八坂神社夏祭り

1）　吉田八幡宮八坂神社夏祭りの概要

本吉田、下吉田、別当河原の３地区で構成される本吉田北自治会と本吉田南自治会では、かつては旧暦６月 15 日、16 日、18 日、19 日の４日間、現在は７月 15 日前後の土曜日と日曜日に夏祭りを行っている。祭りの起源については明らかではないが、市立吉田西小学校が所蔵する『昭和７年録　吉田村郷土誌』の旧暦による年中行事のなかに、「六月十五日祇園祭入り」とあり、昭和初期には既に行っていたことが分かっている。また、神輿は大正時代から変わっていないことが世話人の人々からの聞き取りにより判明しており、古くから行われているものだと考えられている。

戦前は神輿とともにお囃子の山車が出ていたが、戦後お囃子の担い手がいなくなり、現在は神輿渡御のみが行われている。神輿渡御の巡行ルートは、祭りの世話人によって決められ、自治会長宅を中心に吉田八幡宮より南側の地区から県道宇都宮結城線と県道栃木二宮線の交差点周辺までの範囲を中心に廻る。

吉田八幡宮周辺は、近世に物資流通の拠点として発展し、現在も当時の町割が保持され、明治時代以降に再建された神社や民家が分布し、伝統的な集落の歴史を今に伝えている。

2）　吉田八幡宮八坂神社夏祭りに関連する歴史的建造物

①吉田八幡宮

吉田八幡宮は本吉田の北端に位置する。南北に走る県道宇都宮結城線が少し西に湾曲した部分の東側に境内の入口が設けられ、そこからほぼ南北方向に参道が延び、一の鳥居とその脇に社務所、そしてその奥の右手には手水舎と神楽殿、左手に八坂神社、そして最奥に拝殿と本殿が配される。またこれらの建物の周囲に天満宮・淡島神社、雷電神社をはじめ、多くの境内社が点在する。

八幡宮は文治（ぶんじ）４年（1188）に創建され、元亀（げんき）２年（1571）頃には、結城晴朝により社殿の改築が行われたという。現在の社殿は、再建時に木挽（こびき）に対して送った請負証書『郷社八幡宮再建請負証書』から明治９年（1876）に再建されたものであると考えられている。

①－１　本殿

本殿は一間社流造で、屋根は銅板葺とする。上記のように再建時の請負証書から明治９年（1876）の建築であることがわかっている。身舎と向拝をつなぐ海老虹梁や妻飾り、組物等、装飾要素はみられるものの、その装飾は控えめで比較的簡素な印象をうける建物である。

吉田八幡宮本殿

①－２　拝殿

拝殿は本殿と同時、すなわち明治９年（1876）の再建である。入母屋造、屋根は銅板葺、前面は千鳥破風とする。桁行６間・梁間２間と間口が比較的大きいが、組物や彫刻のほとんどみられない非常に簡素な建物である。屋根は近年葺き替えられている。

吉田八幡宮拝殿

①－３　八坂神社

八坂神社は以前、八幡宮本殿北東の淡島神社付近に祀られていたが、拝殿の南西に位置し、かつては神輿舎と呼ばれた建物が、現在八坂神社と呼ばれている。その内部には、神輿が安置され、祭礼時には社殿から出して神事が執り行われる。この建物は、東を正面とする方２間、入母屋造平入の亜鉛鉄板葺で、前面に向拝を設ける。小規模ではあるが、木鼻や海老虹梁等の彫刻、組物、吹寄垂木といった装飾がみられるが、全体としては簡素である。現在、八坂神社と呼ばれるこの建物の詳細な建築年代は不明であるが、『栃木県神社誌』（昭和38年（1963）刊）で当時、神輿舎と呼ばれた建物についての形式などの内容が、現存の建物の形式などと一致すると考えられることから、少なくとも昭和38年（1963）以前の建築であるといえる。

八坂神社

3）　吉田八幡宮八坂神社夏祭りに関連する景観要素

吉田八幡宮八坂神社夏祭りにおける巡行ルート上には、天王様にみる歴史的風致に欠かせない景観要素が分布する。

①林安雄家住宅

旧本吉田村は、江戸時代を通じて旗本松前氏の領地であり、林家はその陣屋※を務め、村の名主を統括していた。

林家の屋敷地は、南北に走る道路を挟んで八幡宮の西側に立地し、道路との境界は大谷石を積んだ塀で画して薬医門を開く。薬医門は、道路境界との間に空間をとり、門の両脇に腰板付の塀を設け、正面右手の脇塀にはくぐり戸を開く。主屋は屋敷地の中央北寄りに配し、その前面の庭を築地塀と中門で画する。そしてこれらを取り巻くように付属屋や屋敷神等が分布する。現存する歴

林安雄家住宅主屋

史的建造物は、町史等によると、明治 10 年（1877）建築の主屋、主屋の北東に接続して設けられている明治 25 年（1892）建築のカマド、明治 36 年（1903）建築の便所および灰小屋、主屋の前面に設けられた築地塀と中門があげられる。

主屋は桁行 10 間半・梁間５間半の平入で、東側を一部２階としているが屋根は寄棟造として２階の高さで全体に架けている。昭和 45 年（1970）に茅葺屋根を亜鉛鉄板葺としたという。町史編さん時の調査時に確認された幕末や明治時代に建てられた付属屋の一部が建て替えられたものの、主屋とともに数棟の歴史的建造物が現存し、近隣の八幡宮と一体となって、本吉田地域の歴史的風致を形成する重要な構成要素であるといえる。

※陣屋：領地を治めるための役所。

② 石造 宝篋印塔（ほうきょういんとう）

この宝篋印塔は、本吉田北の南端に位置する黄梅寺旧境内に位置する。黄梅寺は江戸湯島霊雲寺の末寺で、寛文年間（1661～72）に本吉田を知行した旗本松前氏の祈願寺として深玄律師が開基したと伝えられる。明治４年（1871）の「黄梅寺境内麁絵図（おうばいじけいだいそえず）」によると、境内には本堂、経蔵、供養塔、宝篋印塔、弁天が設けられていた。また明治 22 年（1889）に吉田村が成立すると、境内に明治 31 年（1898）まで吉田村役場が置かれ、庁舎は本堂や不動堂とともに庁舎は平成初期まで残っていたという。

石造 宝篋印塔

宝篋印塔は高さ 4.7mで、石造のものとしては比較的大型である。蓮華の請花上部２段目の基礎四面には「享保二十星紀乙卯仲春鬼宿日」の銘文が刻まれ、享保 20 年（1735）に造立されたことがわかる。なお、子供神輿はこの旧境内を巡行する。

4） 吉田八幡宮夏祭りの流れ

①事前準備

祭りの１か月前頃から祭りの打ち合わせが始まる。打ち合わせでは、祭りを取り仕切る世話人代表１名及び会計２名が選出され、祭りの実施日が決められる。その後、祭りのおよそ１週間前に総代と世話人によって境内の枯枝伐採や除草、祭り前日と当日の準備の打合せが行われる。前日は世話人のみが準備を行い、お仮屋の設置等を行う。当日は世話人と総代が集まり、神輿の飾りつけや神輿の前に台を設置し、供物を供える。

②当日の流れ（神輿渡御）

吉田八幡宮八坂神社夏祭りでは、大人神輿と子供神輿の渡御が行われている。大人神輿は吉田八幡宮の西側に所在する林安雄家住宅を中心とする集落を巡行し、子供神輿は本吉田、別当河原、下吉田を巡行している。祭りの１日目は 11 時頃から吉田八幡宮の境内にある八坂神社の前で宮出し神事が始まり、宮司による祝詞の奉納、祈願が行われた後、役員によってお仮屋へ運ばれる。神輿渡御が始まるまで、世話人はお仮屋で待機し寄進金等の受付を行う。子供神輿は、１日目は 13 時頃から吉田八幡宮を出発し、所々

短い休憩をとりながら吉田八幡宮より東側及び北側の地域を巡行した後、一度吉田八幡宮へ戻り、長い休憩をとる。休憩後は、吉田八幡宮から県道宇都宮結城線を南下して吉田農協倉庫より北側の集落を巡行し、18 時半頃を目途にお仮屋へ戻る。２日目は 13 時頃にお仮屋を出発し、吉田農協倉庫から南側の集落を中心に巡行する。県道宇都宮結城線を南下し、黄梅寺旧境内にある宝篋印塔の前を通過してお仮屋へと戻る。子供神輿の担ぎ手は中学生で、神輿渡御には本吉田北・南子ども会育成会及び世話人２名が同伴し、喪中もしくは訪問を断った氏子宅を除く全戸の玄関先や庭先で「ワッショイ、ワッショイ」と声をかけながら神輿をもみ、披露する。その後、訪問先の住民はお賽銭を納める。奉納されたお賽銭は、神輿渡御が終わった後、お小遣いとして年長者である中学３年生が祭礼終了後に分配する。

大人神輿は１日目、２日目共に 19 時から廻り始める。１日目はお仮屋を出発し、県道宇都宮結城線を南下して本吉田南を廻る。本吉田南自治会長宅に到着すると、夕食を伴う休憩を取る。休憩後は、巡行した道を折り返してお仮屋へと戻る。２日目はお仮屋を出発し、吉田農協倉庫より北側の本吉田北を巡行する。本吉田北自治会長宅で１日目と同様に夕食を伴う休憩を取る。休憩の際には一度神輿をお仮屋に安置し、休憩後、お仮屋まで戻って再度神輿を担ぎ、県道宇都宮結城線を北上して吉田八幡宮へと戻る。神社に到着すると、境内で数分神輿をもみ、最後に「ワッショイ」と大きなと掛け声を出して神輿を高く掲げた後、神輿を下ろす。

吉田八幡宮八坂神社夏祭りの大人神輿の渡御は 19 時に開始することから、休憩場所となる民家では夕食が振る舞われている。夕食の準備は近隣の住民等も手伝い、休憩の際には神輿の担ぎ手やその他の参加者と一緒に神輿を囲みながら談笑する様子が見られ、吉田八幡宮八坂神社夏祭り独特の風景があらわれる。

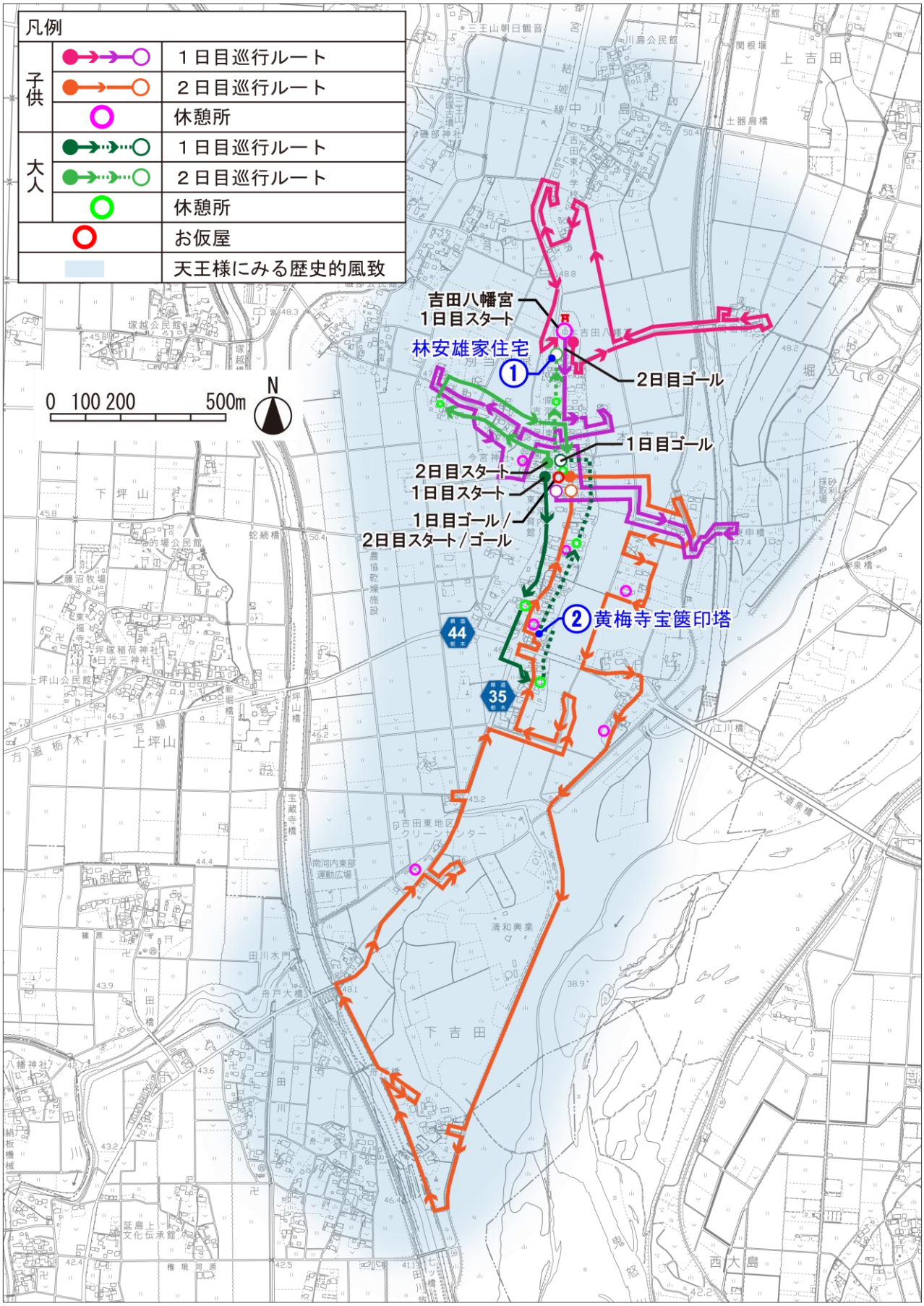
大人神輿の渡御が終了すると、大人神輿、子供神輿ともに神社の境内にある八坂神社の中に保管され、翌朝御霊抜きが行われて神事が終了する。

子供神輿渡御

大人神輿渡御

③特徴的な活動【梵天ふり】

吉田八幡宮八坂神社夏祭りでは、梵天ふりという行事が行われる。悪魔祓いの神事であり、この梵天でお祓いを受けることで厄を落とすことができるという。１日目の午前中に世話人２名が氏子の各戸へ梵天を持って訪ね、家の中で厄除けのお祓いをするのが通例となっているが、子供神輿が渡御する時間に並行して行う年もある。基本的には子供神輿同様、喪中の氏子宅等を除く全戸を廻る。お祓いを受けた民家はお賽銭を納め、神事が終了する。なお、１日で全戸の氏子を廻りきれない場合は翌日の午前中にも行われている。



巡行ルートおよび歴史的建造物（吉田八幡宮八坂祭）

3-3. 石橋愛宕神社八坂祭

1） 石橋愛宕神社八坂祭の概要

石橋愛宕神社八坂祭の起源は明確ではないが、山車が巡行する祭礼の様子を捉えた昭和 25 年（1950）撮影の写真が存在することから、それ以前から行われていたことがわかる。

石橋愛宕神社八坂祭（昭和 25 年（1950））

平成 27 年（2015）度までは石橋地区の６町（本町・旭町・石町・寿町・上町・栄町）が当番制で祭礼を取り仕切っていたが、祭礼の担い手不足により当番制を維持することが難しくなり、平成 28 年（2016）度から愛宕神社氏子総代、青年部等の氏子を中心として構成される愛宕神社八坂祭実行委員会を組織して祭礼を行っている。

祭礼は現在７月 15 日前後の土曜日と日曜日に開催されており、土曜日は石橋地区の人々が主体となったおみこし広場と呼ばれる地域のお祭りが行われ、日曜日は神事である神社の神輿による６町内の大神輿渡御が行われている。

石橋愛宕神社は近世に日光街道の整備に伴い石橋宿が設置されて宿場町として発達した地域に立地する。南北に走る国道４号沿いの神社周辺には宿場町の面影を残す商家であった町家などが残る。

2） 石橋愛宕神社八坂祭に関連する建造物

①石橋愛宕神社

石橋の愛宕神社は現在のＪＲ石橋駅の南西約 500ｍの国道４号の西側に立地する。石橋町史によると、天平宝字３年（759）創建と伝えられ、近世では石橋宿等 13 か村の郷社であった。かつては下石橋愛宕塚古墳の上に鎮座していたが、東北線複線化工事により大正２年（1913）に稲荷神社（現在地）の境内に遷座し、稲荷神社の名称が愛宕神社に改められた。また、昭和 48 年（1973）東北新幹線敷設の際の発掘調査にともない、下石橋愛宕塚古墳の石室の一部が境内に運ばれ保存されている。

境内は道路に面して石造の鳥居が設けられ、東から西へと延びる参道の北側に神楽殿、稲荷神社等が並び、南側に社務所が配される。最奥に本殿と拝殿が石造階段で数段分高いところに設けられている。そして鎮守の森がこれらを覆うように茂っている。

なお、参道北側の中ほどに、八坂神社と記された額が掲げられている小規模な切妻造の建物が２棟並ぶ。２棟とも八坂神社と呼ばれており、八坂神社の内部には神輿や八坂祭に必要な道具などが、おさめられている。

①－１　本殿

本殿は、拝殿よりも少し高い地盤に設けられており、社殿は一間社流造、銅板葺で木部は彩色され、とくに柱や梁、板壁等には朱色の彩色が施される。また、脇障子や軒支輪、向拝上部には鮮やかな彩色を施した彫刻、木鼻には唐獅子等が設けられ、非常に装飾的な建物である。詳細な建築年代は不明であるが、大正２年（1913）の建築との口伝もあるほか、『栃木県神社誌』（昭和38年（1963）刊）では本殿について「流造亜鉛葺赤塗」とあり、現存建物と記載内容が一致することから、少なくとも昭和38年（1963）以前の建築といえる。

石橋愛宕神社本殿

①－２　拝殿

現存する拝殿は、桁行３間・梁間２間の入母屋造平入銅板葺で、前面に向拝がつく。装飾的な本殿に対して、拝殿は彩色も彫刻もほとんどみられない非常に簡素な建物である。詳細な建築年代は不明であるが、この建物の年代に関するものとして内部に「大正２年（1913）建築」の年号のある額が残されているほか、前述の『栃木県神社誌』にも記載があることから、少なくとも昭和38年（1863）以前の建築であり、本殿とともにこの境内に移された大正２年（1913）建築の可能性もあると考えられている。

石橋愛宕神社拝殿

3）　石橋愛宕神社八坂祭りに関連する景観要素

石橋愛宕神社八坂祭りにおける巡行ルート上には、天王様にみる歴史的風致に欠かせない景観要素が分布する。

①　戸田譲一家住宅

戸田家は、石橋の愛宕神社の北、国道４号沿いに位置し、旅籠屋を営んでいたという。東西に長い屋敷地の東辺が道路に面し、レンガ造の門柱と高さ１ｍほどの塀が設けられ、通りからは前栽に植えられた樹木越しに主屋を望むことができる。その背後には、明治25年（1892）建築の土蔵のほか、いくつかの付属屋が配されている。町史等によると主屋は明治元年（1868）建築で、レンガ造本２階建妻入、屋根は入母屋造桟瓦葺、出桁造とする。入口の庇は唐破風として１階前面は鉄格子、２階は木製格子としている。石橋は江戸時代に街道整備にとも

戸田譲一家住宅主屋

ない宿駅がおかれたが、宿場町であった歴史景観を継承してきた貴重な建物であるといえる。

4）　石橋愛宕神社八坂祭の流れ

①事前準備

石橋愛宕神社における八坂祭の準備は、５月の連休明け頃から始められる。その他、神輿を有する６町（本町・旭町・石町・寿町・上町・栄町）の自治会においても各々準備にとりかかる。

また、八坂祭の前日に、注連縄とシデ（幣束（へいそく））が町内の各民家・店舗に配布され、玄関先に飾られる。注連縄は各町内で作成し、幣束は宮司から各自治会へ配布される。各戸の玄関先に注連縄が飾られている光景は祭りの雰囲気をより一層引き立てている。

しめ縄とシデが飾られる風景

②当日の流れ（神輿渡御）

石橋愛宕神社八坂祭は、土曜日と日曜日の２日間にわたって実施される。１日目は、おみこし広場と称する６町の自治会などによる神輿渡御が行われる。これは神社の祭礼ではなく、地域の人々が主体となった行事という位置づけであり、平成 30 年（2018）時点で 35 回目を迎えた。２日目は神社の祭礼として古くから続いている八坂祭が執り行われる。

１日目は、早朝から出御祭が行われたのち、神輿や屋台の飾りつけなどの準備が行われるとともに、各町内の会所において会所祭の準備が行われる。10 時頃から会所祭が始まり、石橋愛宕神社の宮司が順に６町の会所をまわり、神輿渡御の安全祈祷を行う。その後、13 時頃から町ごとに地区内を神輿が渡御する。各町で所有する神輿には、県指定無形文化財・石橋江戸神輿製作技術保持者である小川政次氏によるものもある。夕方になると、各町を練り歩いた神輿一行がグリム通り（中央通り）に集合する。グリム通り（中央通り）におみこし広場が設けられ、各６町に加え、地元幼稚園・中学校・企業などの神輿も集まり、県道鹿沼下野線と交差する地点から戸田譲一家の東側を南北に走る国道４号と交差する地点のおよそ400ｍの範囲を練り歩く。

２日目は、午後から神社の神輿が氏子地域である６町内を巡行する。氏子によって担がれた神輿が会所・中継所に到着すると、神輿を高く上げて拍子木の合図で神輿を下ろす。各会所・中継所では炊き出しが行われており、神輿の担ぎ手に飲食物が提供される。休憩が終わると「始めるぞ」という掛け声とともに神輿の周りに担ぎ手が集まって渡御を再開する。神輿は渡御する町ごとにその町の氏子を中心に担ぎ、中継所において神輿をおろし交代している。６町内すべての渡御が終わると、愛宕神社に戻り（宮入り）、還御祭が執り行われたのち、八坂祭が終了する。

神輿渡御安全祈祷祭（１日目）

神輿渡御とお囃子の山車（１日目）

大神輿渡御（２日目）

神輿が神社に戻る様子（宮入り）

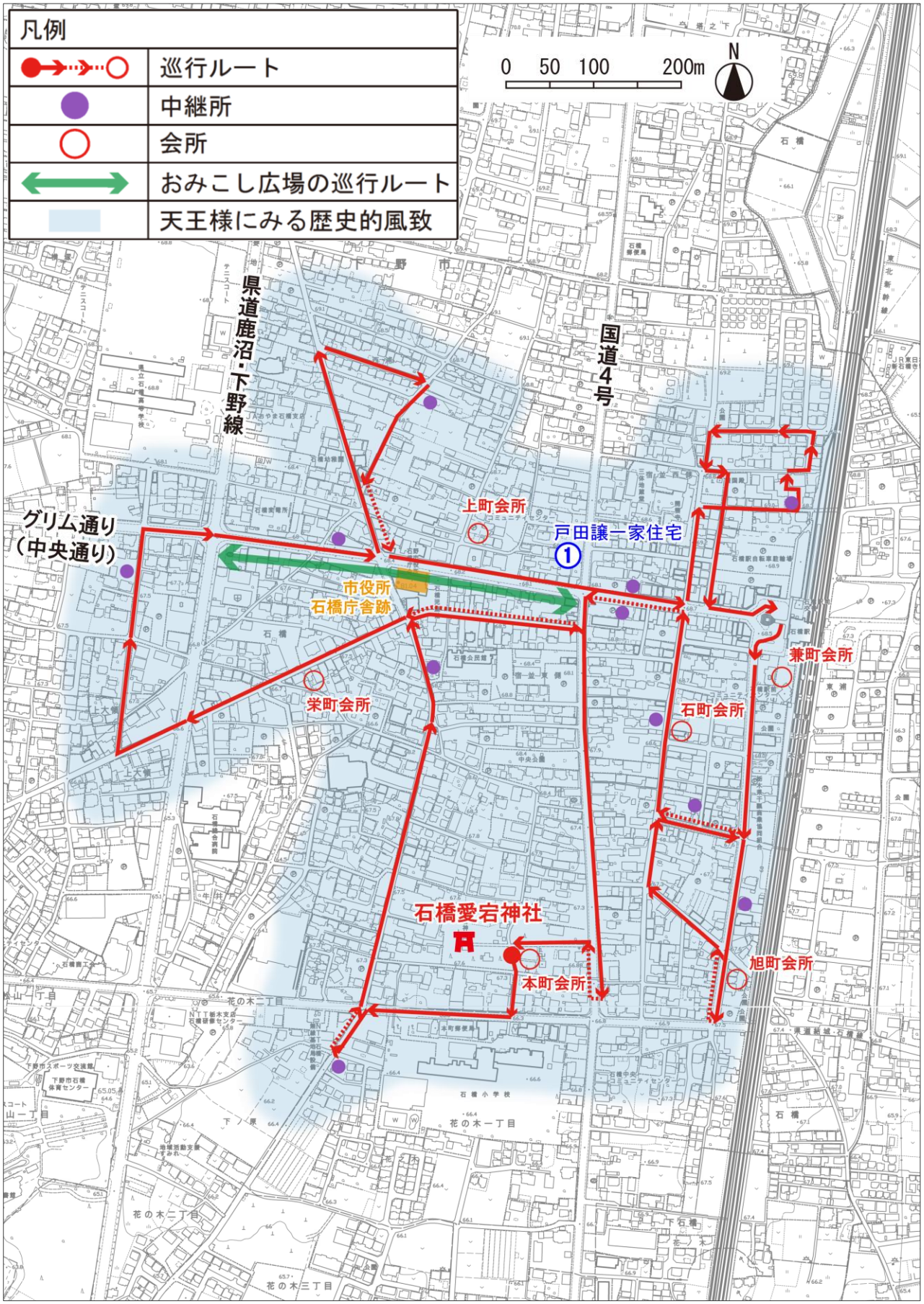
③特徴的な活動【お囃子】

石橋愛宕神社八坂祭では、お囃子の山車が祭りを盛り上げる。お囃子は、石橋町上大領（かみだいりょう）の大杉囃子（おおすぎはやし）と６町の１つである栄町の囃子部によるものである。おみこし広場の神輿渡御の合間に、両者の山車が向かい合って演奏し合う「ぶっつけ」が行われる。

栄町のお囃子部は、コミュニティ推進協議会に属し、地域の子供たちを対象として週に２回練習を行っている。メンバーは、大人約 15 人（内、演奏ができる人は約半数）、子供約 15 人（内、出席している人は約半数）であり、近隣の寿町や旭町の子供も通っている。八坂祭当日は、ベテランの演奏者とともに高校生らも一緒に演奏を行う。

栄町のお囃子

ぶっつけの様子



巡行ルートおよび歴史的建造物（石橋愛宕神社八坂祭）

3-4. 下古山星宮神社八坂祭

1）　下古山星宮神社八坂祭の概要

下古山星宮神社八坂祭の始まりについては明確ではないが、『下古山村地誌編輯材料取調所』（明治17年（1884）調）の下古山村神社明細表に「八坂　祭日旧暦　６月18日」と記載があることから、この頃には祭礼がとり行われていたことがわかる。

主な神事は神輿渡御となるが、神輿はおみこし広場に参加する自治会が所有する大人神輿のほか、神社が所有する子供神輿２基があり、これらの神輿に山車が伴い、氏子地域の下古山自治会地区を練り歩く。現在は、大人神輿が石橋愛宕神社八坂祭のおみこし広場に参加するため、下古山星宮神社の八坂祭としての神輿渡御は、７月15日前後の土曜日に執り行われている。

下古山星宮神社周辺は、農村景観が広がり、神輿が出発する児山館周辺には昭和40年代に建てられた観音堂などの歴史的建造物が分布する。

2）　下古山星宮神社八坂祭に関連する歴史的建造物

①下古山星宮神社

下古山星宮神社は、大同２年（807）創建で、藤原鎌足の10代目の後裔である飛鳥井刑部卿が下古山地方の開拓使として赴任したとき、開墾の守護神として磐裂・根裂神を祀ったと伝えられている。中世には、児山城を築城した宇都宮頼綱の四男多功宗朝の二男である児山三郎左衛門尉朝行によって香取神宮より武運の神徳がある経津主神を勧請したとされる。そして市立古山小学校より西側の下古山一区、二区、三区の３地域の氏神であり、現在は約250人の氏子が存在する。

下古山星宮神社は、下古山の西端に位置し、境内の西側の道路より西は田畑が広がる。参道は神社入口の一の鳥居から北北東へ延び、二の鳥居を経ると左手に社務所、右手に八坂神社が配される。そして数段の石段を上がると左手が神楽殿、正面が拝殿及び本殿となる。また本殿の背後や上記の社殿の周囲に、境内社として大杉神社、千勝神社、横塚愛宕神社などが祀られている。明治45年（1912）の『姿村郷土誌』によると、現在の社殿は明治29年(1896)の再建である。なお、平成２年に屋根の葺き替えを行っている。

①－１　本殿

本殿は、一間社流造で屋根は銅板葺とする。上述のように明治29年(1896)の建築で、柱上部及び妻飾などに少し装飾がみられるが、全体にすっきりとした簡素な社殿である。

下古山星宮神社本殿

①－２　拝殿

桁行３間・梁間２間の入母屋造平入桟瓦葺の建物である。向拝と身舎をつなぐ海老虹梁や水引虹梁に絵様がみられるが、柱上部には組物や彫刻などは施されていない簡素な建物である。『姿村郷土史』によると、本殿と同様に明治 29 年(1896)の建築で、屋根は当初「亜鉛板屋根」であったようである。このほかに神社の年代に関する資料として、正面の柱に板札が取り付けられ、それによると、神楽殿とともに昭和 51 年（1976）４月に屋根が葺き替えられており、その際に桟瓦に改変されたと考えられている。また、拝殿内に掲げられた「正一位星宮大明神」の額の裏面に享保 14（1729）３月、文化 14 年（1817）９月という年号と世話人３人の名が記載されている。

下古山星宮神社拝殿

①－３　八坂神社

八坂神社は、屋根が前面を入母屋造とし背面を切妻造銅板葺とする妻入の建物の中におさめられている。社殿は平成 12 年（2000）に造られた流造の石祠であり、嘉永４年（1851）の年号が刻まれた燈籠とともにおさめられている。

八坂神社

3）　下古山星宮神社八坂祭に関連する景観要素

下古山星宮神社八坂祭における巡行ルート上には、天王様にみる歴史的風致に欠かせない景観要素が分布する。

①観音堂

観音堂は、下古山星宮神社の南東 400mほどに位置する小堂で、近隣の集落の墓地の敷地内に設けられており、子供神輿ルート上に所在する。東を正面とする方２間の方形造亜鉛鉄板葺の建物で、前面に向拝を設ける。建築年代の詳細は不明であるが、設置されている賽銭箱に昭和 40 年（1965）の年号が記され、その頃に建築されたと考えられている。また明治元年（1868）の『下古山村鏡』には「一、観音堂並庵　一軒」という記載がみられ、現存建物の前身建物と思われる。

観音堂

②地蔵

上述の観音堂の南側に２体の地蔵が安置されている。そのうち観音堂側の地蔵には享保３年（1718）の年号が刻まれる。周囲の約 30 軒の氏子に信仰されている地蔵で、地蔵の前掛けは氏子の当番２名によって製作されている。

地蔵

4）　下古山星宮神社八坂祭の流れ

①　事前準備

祭りの１か月前に下古山自治会、下古山こども会育成会（以下、本項では育成会という）、神社総代、神輿を作成した拾壱会（といちかい）、氏子の若い世代の若星会（わかぼしかい）で構成されたおみこし実行委員会が集まり、神事の進行役や供物の受付担当等の当日の役割分担を決める。

本格的な準備は祭りの１週間前になってから始まり、境内や神輿の清掃等が氏子や育成会の人々によって行われる。

②　当日の流れ（神輿渡御）

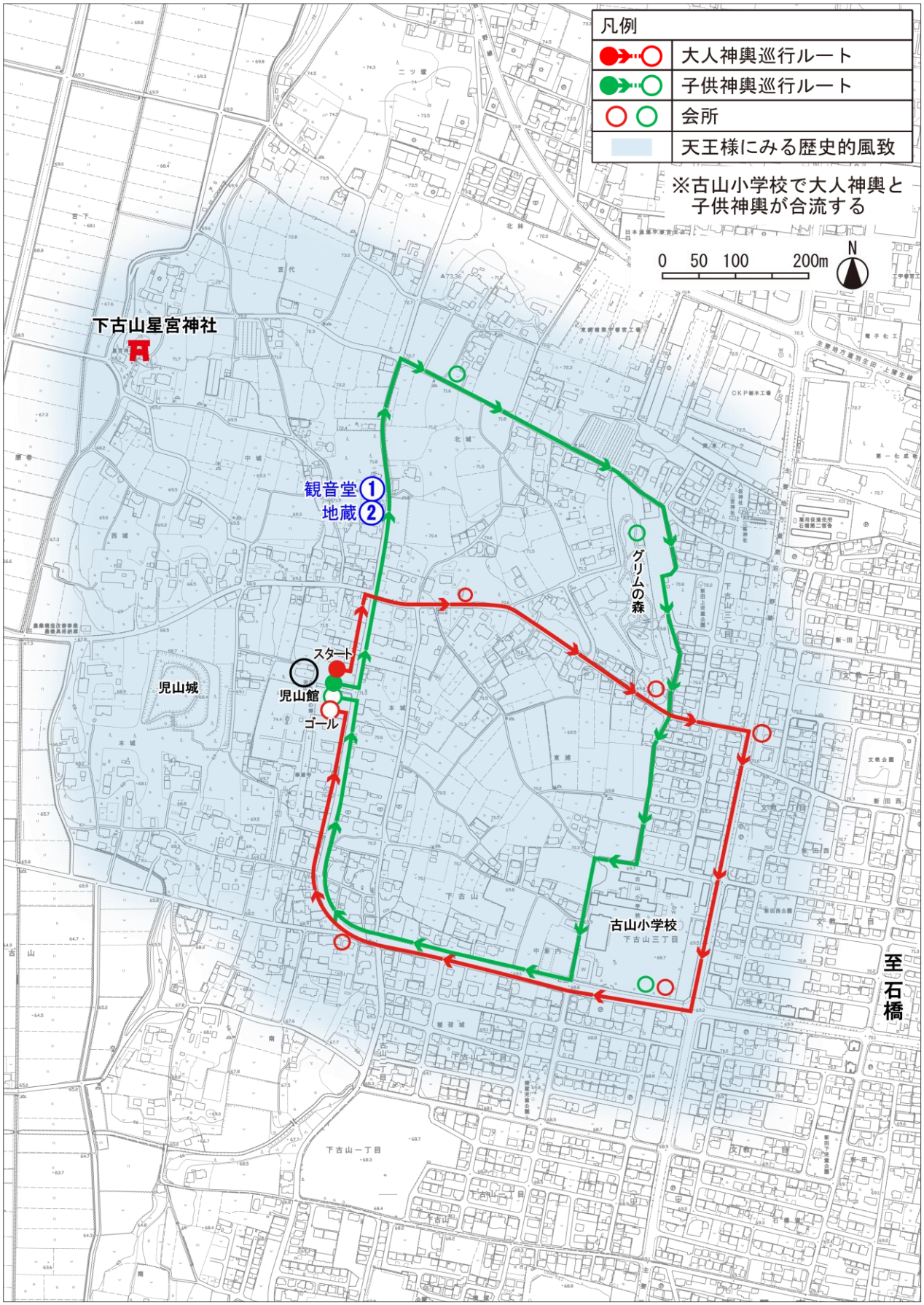
祭りの当日は午前中に神輿の飾りつけを行う。子供神輿の神事が正午過ぎから神社境内にある牛頭天王塔が安置されている八坂神社前で始まり、育成会が見守る中、宮司による御霊入れとお祓い、祝詞奏上、玉串の奉納が行われる。神事が終了すると、子供神輿は大人神輿が安置されている自治会館の児山館へ大人達の手によって運ばれて 13 時過ぎから大人神輿の神事が行われる。内容は子供神輿と同じだが、神輿が安全に巡行し、無事に戻ってくることができるよう、大人神輿の神事は安全祈願祭と呼ばれている。安全祈願祭が終了すると、大人神輿が子供神輿よりも先に児山館を出発し、その後 10 分程度遅れで子供神輿が出発する。神輿は児山館を出て北上し、観音堂と地蔵を通過して市立古山小学校より西側の集落を中心に巡行する。それぞれ休憩を数回取りながら練り歩いて古山小学校で合流し、児山館へと戻ってくる。大人神輿は児山館で休憩をした後、グリム通り（中央通り）へ向かい、他の自治会の神輿と一緒に石橋愛宕神社のおみこし広場に参加し、20 時頃まで賑やかに神輿をもみ、祭りを楽しむ。

子供神輿の御霊入れ

大人神輿の御霊入れ

大人神輿の渡御

子供神輿の渡御



巡行ルートおよび歴史的建造物（下古山星宮神社八坂祭）

3-5. 金井神社八坂祭

1） 金井神社八坂祭の概要

金井神社に集まった子供達（昭和 22 年（1947）頃）
<国分寺町『図説 国分寺町の歴史』, 2000, p.259>

金井神社は小金井の中心に位置し、近世は小金井宿の鎮守であった。創建当時は現在よりも西方に位置し、虚空蔵（こくぞう）と呼ばれていたが、宝暦４年（1754）現在地に遷座、北辰社（ほくしんしゃ）と改称した。その後、星宮神社に名称が変わり、明治５年（1872）に金井神社へ改称している。本市内に多くみられる虚空蔵信仰を発端とする星宮信仰とかかわりの深い社で、開拓・開墾の神と考えられている磐裂神、根裂神の二神を主祭神としている。

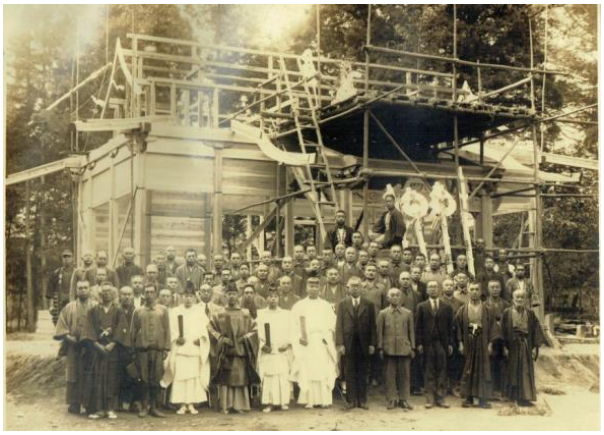
金井神社の八坂祭の発起は明らかではないが、大越家が所有する江戸時代の古文書に祭礼に関する記載がある。古文書によると、全国で疫病が流行した安永５年（1776）頃に神輿を作り、毎年６月 14 日と 15 日に神輿の巡行が行われていた。その後、天明年間（1781～1789）の凶作により神輿の巡行ができなくなり、また、文政６年（1823）の火災により神輿が焼けてしまい、一度途絶えてしまったが、氏子の強い要望により神輿を新たに造り、嘉永４年（1851）に祭礼が復活したと書かれており、この頃には祭礼が行われていたことがわかっている。

現在、祭礼は７月 15 日前後の日曜日に行われ、祭礼当日の午前には神社と氏子地域の会所での神事を執り行う。八坂祭当日は神社の拝殿に大人神輿が飾られ、それぞれの自治会の子供神輿が渡御する。

金井神社八坂祭における神輿渡御の巡行ルートは、江戸時代に日光街道の整備に伴い小金井宿が設置され発展した地域である。様々な人々の往来や商品流通が盛んな宿場として栄え、江戸時代には 80 軒を超える商家が立ち並ぶ地域であった。現在は、建て替え等によりほとんど失われてしまったものの当時の町割は残っているほか、江戸時代から明治初期までに建てられた商家等や門、社寺等がわずかながら残っており、宿場として繁栄していた時期のまちなみの一端を窺うことができる。

2） 金井神社八坂祭に関連する歴史的建造物

①金井神社



金井神社拝殿上棟祭（昭和 18 年４月）

『栃木県神社誌』（昭和 38 年（1963）刊）によると、金井神社は金井村の農商業の守護神として勧請され、虚空蔵の宮と称した。現在地より西方に位置していたが、宝暦４年（1754）に現在地に移され、近世には小金井宿の鎮守となり北辰社あるいは北辰宮と呼ばれ、慈眼寺が別当をつとめていたという。後に星宮神社となり、明治５年（1872）に金井神社となった。金井神社は、現在の国道４号の西側に位置し、東を正面として国道沿いに鳥居を設けている。敷地は東西に細長く、参道北側中ほどに社務所、手水舎、その奥に天満社および雷電神社と八坂神社が配されている。なお、『栃木県神社誌』では記載のある神楽殿は現存していない。八坂神社の社殿は小規模で、一間社流造、銅板葺とし、木部には彩色が施されている。

①　－１　本殿：市指定文化財

彫刻が施された本殿

本殿は一間社流造、屋根は入母屋造柿葺とし、一間が４尺と小規模ながらも屋根前面には千鳥破風と軒唐破風をのせる。壁面をはじめ、向拝柱、海老虹梁、脇障子等に壮麗な彫刻が施された大変装飾的な建物である。その彫刻は、富田宿（現栃木市大平町）を本拠地とした磯部氏系統の彫刻師によると考えられ、彫刻の様式から天保期から嘉永期頃の建築と考えられている。また彫刻に寄進者とみられる人物の名が刻まれ、その多くに女性の名がみられることから、小金井宿の商家や旅籠屋の多くの女性が寄進していたと考えられており、大変特徴的である。

①－２　拝殿

金井神社拝殿

拝殿は桁行６間・梁間２間半平入の入母屋造銅板葺の建物で、上棟式の写真などから昭和 18 年（1943）の建築であることがわかっている。基礎には大谷石を据え、組物や彫刻の少ない昭和初期のすっきりとした印象の社殿である。なお、昭和 15 年（1940）の古写真では前身建物の様子が確認できるが、現存の建物より規模が小さく、屋根は寄棟造であった。

3）　金井神社八坂祭に関連する景観要素

金井神社八坂祭における巡行ルート上には、天王様にみる歴史的風致に欠かせない景観要素が分布する。

①小金井一里塚：国指定の史跡

小金井一里塚（西）・（東）

一里塚は江戸日本橋を起点に、道程の目印として１里（約４km）ごとに塚を築いて榎（えのき）や松を植えたものである。徳川家康が慶長９年（1604）に主な街道に造らせたのがきっかけとなり全国に広まったといわれる。『官本当代記』によると、「一里塚五間四方也」とあり、１辺約９ｍの方形に築かれていたとされる。小金井には、日光街道における江戸から 14 番目の宿駅が置かれ、一里塚は『日光道中分間延絵図』や『日光道中宿村大概帳』、『日光道中絵図』にみられることから、18 世紀末までには築造されていたと考えられている。

長年風雨にさらされたため、現状では形が崩れて円形化しているが、現状で１辺約 12mの大きさで、つくられた当時は方形であったことがわかっている。また、発掘調査により旧日光街道の砂利敷道路とその側溝が確認され、紐に通された寛永通宝（かんえいつうほう）（50 枚）や茶碗などの陶磁器の破片が出土した。現在は、整備が行われ史跡ポケット広場として公開されている。

②古島正一家住宅

古島家住宅は、屋号を「橘屋」といい、旧日光街道に面して主屋が建てられた町家形式の民家である。平成 14 年度（2002）に国分寺町教育委員会によって調査及び保存管理活用計画案が作成されている。それによると主屋は蔵造で店蔵とし、建築年代は建築形式より幕末から明治初期で、桁行４間・梁間２間半の２階建、切妻造平入桟瓦葺とする。店蔵の背面に増築された住宅棟は、建築形式より明治後期から大正初期の建築で、木造平屋建の寄棟造鉄板瓦棒葺とする。

古島家住宅主屋（店蔵）

屋敷地内には土蔵が３棟現存し、文庫蔵と呼ばれる明治９年（1876）建築（墨書より）の土蔵は、桁行３間・梁間２間の木造２階建で切妻造桟瓦葺である。また北東の土蔵は、明治 18 年（1885）建築（墨書より）で２階建切妻造桟瓦葺、南東に位置する土蔵は詳細な建築年代は不明であるが、建築形式より幕末の建築と考えられ、２階建の切妻造桟瓦葺である。

③俳諧碑：市指定文化財（歴史資料）

小金井宿に所在した蔵田屋という旅籠屋の跡地に建立された石造の句碑で銘文によると文化４年（1807）のものである。句碑の片面には慈眼寺 30 世住職宜照のものと思われる漢詩と俳諧４句が、もう一面には江戸の談林俳諧７世の谷素外による「名月と花も紅葉もある夜かな」の句と、地元の 12 人による俳諧が刻まれている。この碑から、小金井宿には俳諧を行う人々の集まりが形成されており、慈眼寺の住職を中心にたびたび句会が開かれていたことがうかがえる。

俳諧碑

4）　金井神社八坂祭の流れ

①事前準備

八坂祭開催の１週間ほど前から準備が始まる。各町内の会所では紅白の幕を周囲に巡らせてお仮屋を設置し、八坂神社の掛け軸を飾る。なお、神事が行われる金井神社では境内の清掃や提灯の飾りつけが行われる。下町南部では、しめ縄と幣束が配布され、各戸の玄関に飾られる。会所には子供神輿が飾られ、祭当日まで地元住民がお参りし、お賽銭や供物を納める。

②当日の流れ（神輿渡御）

八坂祭当日は、８時頃から境内・拝殿内の掃除や飾りつけなどの準備が始められる。拝殿の祭壇に蠟燭をつけ、太鼓による合図が告げられると、宮司によるお祓い、遷御（降神の儀）、献饌（けんせん）、祝詞奏上、宮司による篳篥（ひちりき）の演奏、玉串奉奠（ほうてん）など一連の神事を執り行う。その後、金井神社境内にある八坂神社においても神事が執り行われる。その後、小金井地区の４つの会所に宮司と神社総代会会長、猿田彦が出向いて祈祷を行う。なお、会所に向かう道沿いには俳諧碑や古島正一家住宅が存在する。

八坂祭の神事と併せて、小金井の上町、下町、駅前の各自治会では子供神輿の渡御が始まる。下町自治会では北部と南部でそれぞれ子供神輿を所有しており、分かれて地区内を巡行する。どちらの神輿にもお囃子屋台が伴い、子供達が中心となって演奏する。

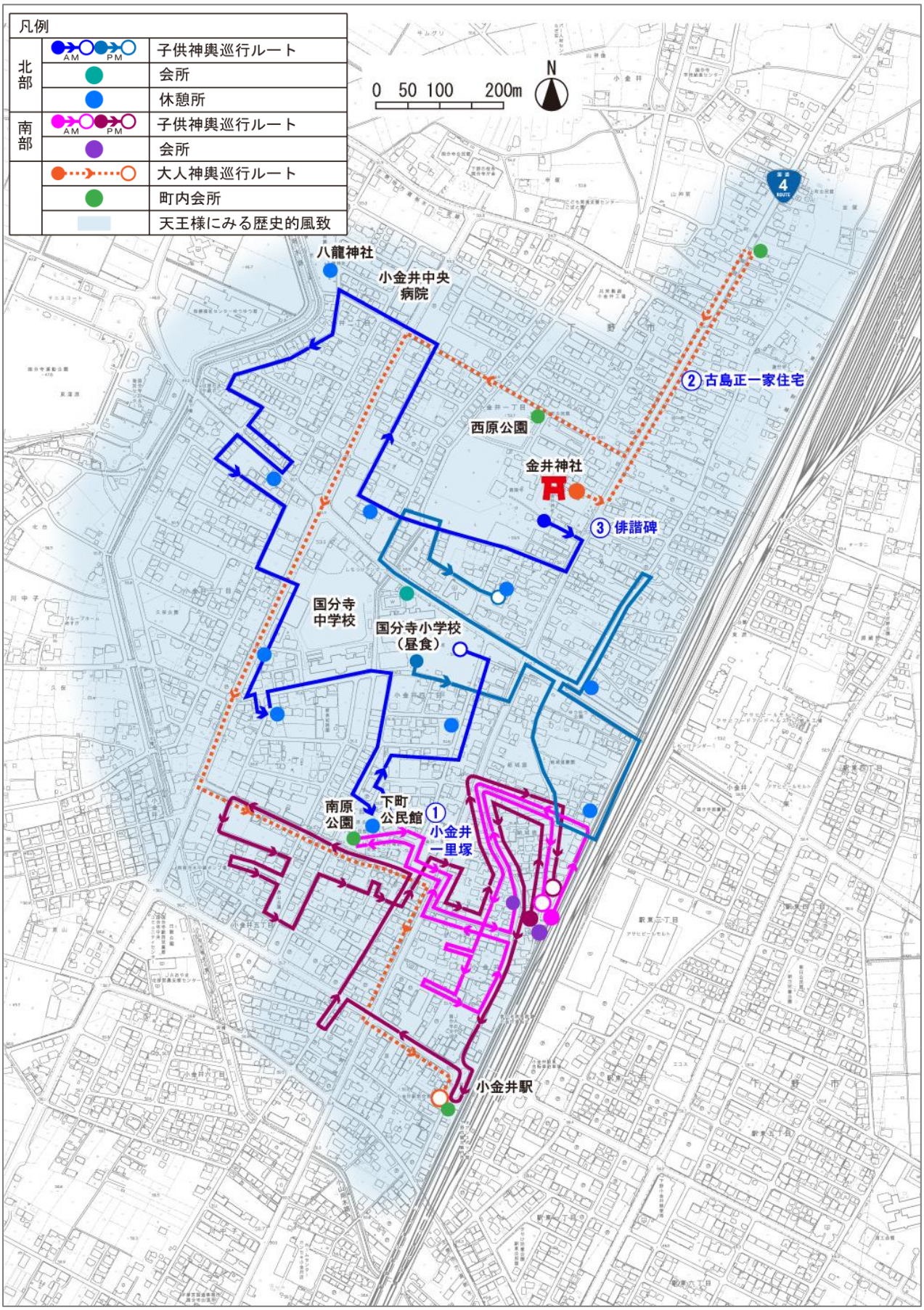
下町北部は金井神社の隣に所在する慈眼寺にて神事を行ったあと、慈眼寺を出発し、下町北部地区を巡行しながら下町自治会の会所がある下町公民館まで南下し、再び北上して国分寺小学校で昼食休憩をとり、休憩後は国道４号東側の地区を巡行する。下町南部は主に小金井一里塚を中心に、半径およそ 500m の地域を巡行している。午前中は国道４号より西側の小金井駅周辺を巡行した後、子供神輿の会所へ一度戻り、昼食をとる。午後は、国道４号東側の小金井一里塚より南側を中心に巡行し、会所へと戻る。

八坂神社での神事

下町北部の神輿渡御

下町南部のお囃子屋台

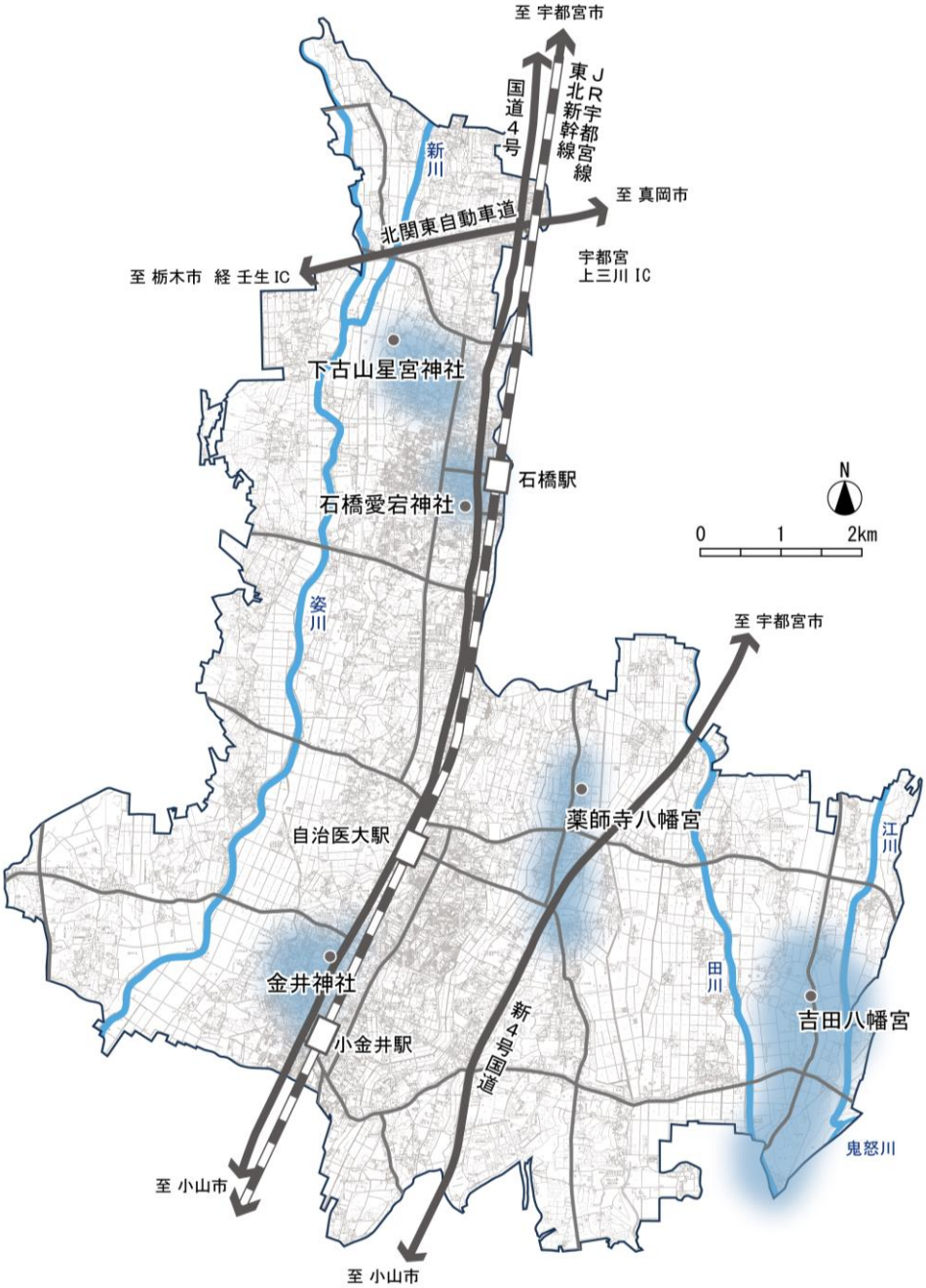
下町南部のお祓いの様子



巡行ルートおよび歴史的建造物（金井神社八坂祭）

(3) まとめ

毎年７月中旬、本市では現在も各地で天王信仰に基づく祭礼（天王様）が行われており、夏の風物詩となっている。人々は何日も前からそれぞれの神社や公民館等に集まって準備を行い、祭り本番は、氏子をはじめとする地域の人々が協力し合って神社や自治会に受け継がれた神輿が町内を渡御するなど、威勢のいい掛け声やお囃子の軽快な音色が各神社を中心とした氏子地域に響き渡る。また、天王様は地域の歴史や伝統に触れる機会であるとともに、世代を超えて住民間の交流を図ることができる場を提供している。祭りを通して人々は日々の平穏な生活に感謝し、この地域の一員であることを改めて認識し、このまちで暮らすことの喜びや幸せを実感する。本市の天王様は各神社の神輿や山車、屋台の巡行とそれらが通る町並みが一体となって歴史的風致をつくりだしている。



天王様にみる歴史的風致

コラム

柴北の天王様

小金井駅より東の柴北においても、金井神社八坂祭と同じ時期に天王様が行われている。お祓いの大幣（ボンデン）を先頭に子供神輿、大人神輿、お囃子の屋台が地区内を巡行する。他の天王信仰に基づく祭礼と同様、世話人等家より、お酒やジュース、お握り、スイカ、アイスといったものを御馳走される。『国分寺町史　民俗編』によると、かつては、この地域では神輿を担ぐ子供達を親しみを込めて「小若（こわか）」や「小若衆（こわかいしゅう）」と呼んでいたという。

小学新入生祈願祭

吉田八幡宮では、新小学１年生の希望者を対象に入学式の日に学校生活の安全を祈願する祭りを行っている。３月に対象となる家庭に案内を配付し、希望者を募る。

当日は入学式の時間前に祈願祭を実施するため、早朝から総代によって供物や手水等が準備される。児童とその家族は、神社にて宮司と一緒にこれからの学校生活を安心して過ごせるよう祈願した後、学校へ向かう。

金井神社の愛宕祭（子供相撲）

金井神社で行われている子供相撲は愛宕祭と呼ばれ、火伏の意味を持った祭りである。東北新幹線建設により、金井神社に合祀された愛宕神社に関連する祭礼である。愛宕神社が小金井宿の京塚と呼ばれる場所に鎮座していた頃、毎年７月 24 日に行われていた子供相撲が、金井神社に合祀された後も愛宕祭として受け継がれ、現在は八坂祭の翌週に実施されている。

愛宕祭は小金井の４つの自治会が毎年当番制で担当しており、前日に当番の自治会が土俵の準備を行う。当日は神社内で宮司が９時より火伏の祈願を行い、10 時頃から社務所にて氏子総代と自治会長が直会を昼頃まで行った後、それぞれの会所に戻り、会所に待機している氏子に神事が無事行われたことを報告し、神事が終了する。子供の奉納相撲は 13 時半から始まり、16 時半頃まで行われる。参加者は小金井に住む子供がほとんどであるが、他自治会の子供も参加可能であり、対戦は男同士、女同士で行われている。奉納相撲終了後、参加した子供たちにはお小遣いが配られる。